

---

# 食卓で浮かんだ事。

一柳 紘哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食卓で浮かんだ事。

### 【Nコード】

N5526B

### 【作者名】

一柳 紘哉

### 【あらすじ】

お菓子の枕で眠る彼の事を、町の皆は馬鹿にしている気がする。

お菓子の枕で每晚眠る彼のことを、この町の皆は馬鹿にしていると思う。

皆が皆、彼の事を子供っぽいと言って指を刺して笑うからだ。

お菓子というのが子供っぽい印象を与えるのだろうか？

でも、僕はそうは思わない。

彼は身長だつて高いし（2m2cm）、暖かくて眠りやすい優しい匂いのするお菓子の枕を每晚キチンと焼きなおしては取り替えるし、仕事だつて（ネジ工場に勤めてる）早いし責任感だつて強い。

でも、お菓子の枕でしか眠れないという彼のちょっと変わった部分で大多数の人は勝手に間違つた判断をしてしまうのだ。

残念に聞こえてしまうけど、とても寂しい。

僕は彼と友達になりたかつた。

彼と僕は殆ど同じ趣味を持っていた。

音楽は同じジャムバンドを好んで聞いていたし、週一回は必ずレンタルビデオ店で五本何かを借りていくのも同じだつた。

それに、なんとと言っても彼と似ている部分は僕は毎日お菓子で作

った眼鏡を身に着けなきゃ外出できないって事だ。

でも、僕はうまいこと逃げ回って町の皆に馬鹿にはされてない。

なぜなら、皆が皆。僕の眼鏡をバームクーヘンみたいなお洒落な眼鏡だねって勘違いして間違えてくれるからだ。

僕は彼の家の隣にある青い犬小屋の脇から彼を見る。

真昼の小さな緑の庭で彼はお菓子の枕で眠っている。

とても堂々としていて、僕はなんだかとても恥ずかしくなった。

僕は彼と友達になりたいんだ。

でも、僕は本当に情けない人間で、前に町の皆と彼のことを馬鹿にしてしまったことが頭によぎってしまって、話しかけることができない。

真昼の悪戯な風がふいて、彼の家から甘くて優しい匂いが香る。

僕は彼に話しかけるタイミングを掴むために、毎日隠れて彼を見る。

お菓子の眼鏡を食べながら。

(後書き)

本当にただパツと食卓で浮かんだ話です。知り合いの先生の家でお菓子を出された時に浮かんだだけで、頭の中で掘り下げても何もならないですが何故か文字にしたら少し意味をもってるように感じたのでモノとして出してみました。読んでもらって本当にありがとうございます。ピース

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5526b/>

---

食卓で浮かんだ事。

2010年10月17日18時48分発行